

# 詩人と西風—P. B. シェリーの 「西風に寄せるオード」

池 田 景 子

## 1. はじめに

1817年、P. B. シェリー (P. B. Shelley) はメアリ (Mary) とともにイギリスのマーロウ (Marlow) に転居する。最初に結婚した妻ハリエット (Harriet) ととの間にできた子どもの親権問題に決着がついた年であった。前年暮れにシェリーは駆け落ちしたメアリと正式に結婚し、1817年に息子ウィリアム (William) とともにマーロウにて新しい暮らしを始める。当初、シェリーはこのマーロウのアルビオンハウス (Albion House) を生涯の棲家と考えていた。<sup>1</sup> だが、経済的な問題、シェリー自身の健康面の問題、1817年出版の長編物語詩「ラオンとシズナ (*Laon and Cythna*)」に対して向けられた酷評など、様々な問題を抱え、1818年3月にシェリーはメアリらとともにイギリスを去り、イタリアへ向かう。1818年後半には第2子クララ (Clara) を亡くす不幸に見舞われるが、イギリスを離れイタリアへと渡ったシェリーの想像力に新たな火がともされたのか、翌年1819年は P. B. シェリーの創作活動が多岐に渡り、多くの代表作が生み出される。スチュアート・カラン (Stuart Curran) によれば、1818年秋の初めから、1820年の初めがシェリーにとっての「驚異の年 (annus mirabilis)」であり、彼の才能が開花した時期である (Curran, preface xiii)。

---

<sup>1</sup> See Holmes 367.

この時期に非暴力の革命と愛の重要性を詠った劇詩『縛りを解かれたプロメテウス (*Prometheus Unbound*)』や、イギリスで起きたピータールー大虐殺事件を受けて『無秩序の仮装行列 (*The Mask of Anarchy*)』が執筆される。さらに、1818年10月にシェリーはフィレンツェへと居を移した際、アルノ川 (the Arno) 沿いを散策時に、西風が季節の変化をもたらす自然界の様子を目にする。このとき彼が自然のサイクルと詩人の想像力が世界へ変革をもたらすさまを重ね合わせて描いていたのが、「西風に寄せるオード (“Ode to the West Wind”)」である。本詩は1819年10月20日から25日に執筆され、『縛りを解かれたプロメテウス』とともに1820年に出版されることになる。本稿では、シェリーの「西風に寄せるオード」を取り上げて、その概要を整理したい。

## 2. 「西風に寄せるオード」執筆の背景についてシェリーの注記

シェリー自らが「西風に寄せるオード」を執筆する契機となった出来事を説明している。以下がその全訳である。

この詩はフェレンツェ近郊にあるアルノ川沿いにある森で着想を得て、大部分が執筆された。その日は嵐のような激しい風が吹き、その特徴は温暖であると同時に活気のあるものであったが、秋雨をもたらす雲を集めていた。私の予想通り、その秋雨は日没に降り始め、ひょうと雨を含んだ激しい嵐とともに幕を開け、アルプスの南側地方 (ie. イタリアから見て南側) に特有の激しい雷を伴っていた。

(本詩における) 第3連結びで言及される現象は、博物学者にはよく知られたものである。<sup>2</sup> 季節の変わり目になると、海底や、川床、そして湖

---

<sup>2</sup> シェリーの言う第3連とは、作品におけるパート III のことである。本稿ではパート I、パート II と呼ぶこととする。

底にある植物は、地上の植物と共鳴して、やがて季節の変化を告げる風に影響を受けるのである。<sup>3</sup>

この記述からもシェリーが気象学的・博物学的知識をもとに「西風に寄せるオード」を執筆したことがわかる。実際、先行研究においてもシェリーが科学的知見に基づいて「西風に寄せるオード」を執筆した点が評価されている。<sup>4</sup> 秋雨をもたらす雲、ひょうが入り混じった雨、アルプス地方に特有の雷といった天候の特徴は、「西風に寄せるオード」のパートⅡにおける描写に反映されている。また、シェリーはパートⅢで陸上の植物と海底の植物が西風の影響を受けて冬景色へと変化していくさまを描いている。このあたりの描写についても、シェリーの想像力のみで描かれたものではないのは明らかである。なぜなら、上記に記載したシェリーの説明によると、博物学的常識においては、陸上の植物も水面下にある植物も、西風に影響を受けて、それぞれ共鳴し合い、季節の変化に応じた変貌を遂げることになるからである。

### 3. 「西風に寄せるオード」テキストの全訳

「西風に寄せるオード」<sup>5</sup>

I.

おお、荒れ狂う西風よ。汝は秋という存在から出された息吹よ。

目には見えない汝の存在から枯葉が

呪術師から逃げる幽霊のように追い立てられている。

---

<sup>3</sup> テキストは *Poems* III, 204n に拠る。

<sup>4</sup> E.g. Reiter 228.

<sup>5</sup> 底本は *Poems* III, 204-212 に拠る。また、訳にあたってはアルヴィ宮本なほ子編『対訳シェリー詩集—イギリス詩人選(9)』岩波文庫、2013年も参照した。

黄色の、黒の、青白の、そして病的に高潮した  
疫病を患ったような群集が（追い立てられている）。おお、汝よ  
そんな枯葉の群集が眠る冬の暗い苗床へと馬車を飛ばして

羽のついた種子を蒔いていく。そこでは枯葉の群集が冷たく身を低くして  
横たわっており  
それぞれ（の様子）は墓場の中に眠る遺体を思わせるが、ついには  
汝の妹、紺碧の空を思わせる春が

夢路にある大地の上にクラリオンを吹き鳴らして  
（羊に草を食ませるがごとく、空中に芳しい蕾をせき立てて [花開かせ]  
ながら）  
平野や丘には生命力に満ちた色合いと香りを満たしていくだろう。

荒れ狂う精霊よ、いたるところで動いている者よ。  
破壊者であると同時に保存者よ。聞け、さあ聞け！

## II.

汝よ、そのうねりに乗じて、切り立つように高い空において繰り広げられ  
る激動の真っ只中で  
大地の上の朽ち果てた葉のように卷雲が流し出されて  
天と大洋の絡み合った枝から揺さぶられ

雨と雷の先触れとなる。  
空気がうねる真っ青な汝の表面を広がるのは  
迫りくる嵐の毛髪で、

激情したマイナスの頭から逆立つ、

鮮やかな毛髪のような。

それは地平線のほの暗い淵から天球の頂上まで広がっていく。汝、死にゆく年の葬送歌よ、

その歌に合わせて、この暮れてゆく夜は

広大な墓の円蓋となって

汝の結集した力でアーチ上の天蓋を作り出しているのだらう。

その結集した力は蒸気でできており、蒸気の濃密な空気からは黒い雨、火、ひょうが噴出するだらう。おお、聞け！

### Ⅲ.

汝よ。汝は夏の夢から

青い地中海を目覚めさせた。そのとき地中海は

澄明な流れが作る渦潮であやされて

ベイイの入り江にある軽石島のそばで横たわり、

眠りの中で古い宮殿や塔が

波の強烈な日光の中で揺らいでいるのを見ていたところであった。

その古い宮殿や塔には空色の苔と花が一面に生えていて

あまりに甘美でその様子を描こうとすると気を失ってしまう！汝よ。

汝の通り道を開けるため、大西洋の海原が持つ力は

自らを引き裂き亀裂を作る。一方で、はるか海面では

海花と泥を含んだ木々が  
海の干からびた群葉をまとめて

汝の声を知ることになる。そして突如として、恐怖に青ざめ  
震え、枯れてしまう。おお、聞け！

IV.

もし私が汝が運ぶ一枚の枯れ葉であったなら。  
あるいは汝とともに飛んでいく一切れの俊敏な雲であったなら。  
汝の力の下で喘ぐ波で

汝の強い推進力を分かち合うことができたなら。仮に汝よりも  
自由が利かないにしても、だ。制御され得ない者よ！もし、  
私が少年時代のときのようにありさえすれば、そして

汝が天を逍遥するときの友であれば、  
汝の空を駆け抜ける速さを追い抜くことも  
夢ではないように思われたあのときのようにであれば。私は

このように本当に困った状態で苦勞して汝に祈ったりはしなかっただろう  
に。

ああ、私を引き上げてくれ。波のように、葉のように、雲のように。  
人生の茨の上に落ちてしまう！血が流れる！

時の加重が鎖を付けて頭を垂れさせたのだ  
汝のような者を。人には馴染まず、俊敏で、誇り高き者を。

V.

私を汝の堅琴にしてくれ。森のように。

私の葉が森と同様、落ちてでも構うものか！

汝の力強い調べの混成が

私たち両方から、深い秋の音色をひとつ引き出すだろう。

甘美な音色だが悲しみを湛えている。熱烈な精霊よ、汝は

私の精神となれ！汝は私となれ、猛烈な者よ！

私の死んだ思想を全世界に追いたてよ

新たな誕生に蘇生するのを急ぐ枯れ葉のように。

そして、この韻文の魔力によって

火が消えることのない炉床から灰と火花をばら撒くように

私の言葉を人類にばら撒くのだ！

私の唇を通して、未だ目覚めぬ大地へと

予言のトランペットを響かせよ！おお、風よ、

冬が来れば、春の訪れはそう遅いものではないだろう？

#### 4. テクストの概要

本詩は5つのパートでできており、各パートはテルツァ・リーマ(三韻句法)の4連に帰結のカプレット1連という14行ソネットの形式で構成される。テルツァ・リーマとは3行から成る連句に、最初の連句における2行目が次の連句の1行目と3行目に引き継がれていく押韻形式である。通常、この押韻形式は aba, bcb, cdc, ded, ee と表記される。日本語訳では分かりづらいので、パー

ト I のテキストを引き合いに出すと次のようになる。

O wild West Wind, thou breath of Autumn's **being**, —(a)  
Thou, from whose unseen presence the leaves **dead** —(b)  
Are driven, like ghosts from an enchanter **fleeing**, —(a)

Yellow, and black, and pale, and hectic **red**, —(b)  
Pestilence-stricken multitudes: O **thou**, —(c)  
Who chariotest to their dark wintry **bed** —(b)

The wingèd seeds, where they lie cold and **low**, —(c)  
Each like a corpse within its grave, **until** —(d)  
Thine azure sister of the Spring shall **blow** —(c)

Her clarion o'er the dreaming earth, and **fill** —(d)  
(Driving sweet buds like flocks to feed in **air**) —(e)  
With living hues and odours plain and **hill**: —(d)

Wild Spirit, which art moving **every where**; —(e)  
Destroyer and Preserver; hear, O **hear** ! —(e)

(“Ode to the West Wind” l1-14 emphases mine)

本詩の内容面を見ると、最初のパート3つで語り手は西風に「汝 (thou)」と呼びかけ、西風が自然界の事物に働きかける様子を「汝」のあとに続けて描写していく。原文では Thou の呼びかけの直後に関係代名詞節が続き、西風と自然界の様子が描写されていく。<sup>6</sup> 本詩では特に西風が影響を与える3つの事物（枯葉、雲、波）に描写の焦点は当てられ、西風が冬の到来ばかりではなく、



その冬の先には春が待っていることが示される。だが、パートⅠ～Ⅲに見られる枯葉、雲、波は一見独立しているようで、この3つの自然物はすべて枯葉のイメージに集約されていく。<sup>7</sup> まず、パートⅠは西風に追いやられる枯れ葉の様子と、枯れ葉が地中の種子にとって養分となって春の植物の再生を促す様子が描かれている。さらに、パートⅡにおいて、大空には「大地の上の朽ち果てた葉のように巻雲が流し出されて／天と大洋の絡み合った枝から揺さぶられ (like Earth's decaying leaves are shed, / Shook from the tangled boughs of Heaven and Ocean)」ていく様が描かれ、雲は葉に喩えられる (“Ode to the West Wind” II. 16-17)。さらに、パートⅢにおいては、波の下で西風に反応する植物、「海花と泥を含んだ木々 (The sea-blooms and the oozy woods)」が震えて葉を落とす様が描かれる (“Ode to the West Wind” III. 39)。陸上の植物と海底のそれが共鳴し合う様子は、シェリー自身が注記している現象でもある(本稿セクション2を参照)。このようにパートⅢまで西風に影響を受ける枯葉のモチーフが一貫して見られ、パートⅣで詩人が枯葉のように西風に吹き上げられることを望む。ここで詩人は枯れ葉だけではなく、海の波や雲との同一化も同様に望んでいるため、パートⅡやⅢで見られた雲や海のイメージが枯れ葉のモチーフと同列化される。さらにパートⅤにいくと、葉 (leaves) は、「枯葉」と「本の頁」のダブル・ミーニングを含み、詩人の言葉・思想と深く結びついていく。<sup>8</sup>

では、パートⅣとⅤを少し詳しく見ていきたい。パートⅣで一人称の語り手である<私>が初めて登場し、西風と詩人である<私>との関係に焦点が当てられる。パートⅣでは、詩人も西風の自由で不屈な精神にあやかりたく思い、

<sup>6</sup> Thou への呼びかけは、パートⅠからⅢの中で7回目見られる。See “Ode to the West Wind” I. 1, 2, 5; II. 15, 23; III. 29, 36.

<sup>7</sup> See Blank 217, Wasserman 240. Kapstein はシェリー作品を通して風と葉のイメージは繰り返し登場することを指摘している (1074-76)

<sup>8</sup> Blank 217. see also *OED*, “leaf.” def. I.1.a., 3.a., II.7.a.

少年時代の自由に思いを馳せる。そして、少年時代のように、詩人も身軽に空へと舞い上がろうと、波、枯葉、雲のように西風に引き上げられることを望む。「私を引き上げてくれ。波のように、葉のように、雲のように。(lift me as a wave, a leaf, a cloud!)」は、＜私＞の切実なる願いである(“Ode to the West Wind” IV. 53)。このように詩人は上昇を望むが、果たせるかな、「人生の茨の上に落ちてしまう！(I fall upon the thorns of life!)」(“Ode to the West Wind” IV. 54)。詩人は落下し、「血を流す(I bleed!)」。ここで詩人を下方へと引き下げるのは「時の加重(A heavy weight of hours)」である(“Ode to the West Wind” IV. 55)。つまり、子ども時代には西風の「仲間(comrade)」のように、身軽であった詩人も、現在は年を重ねて上昇することはできなくなっている(“Ode to the West Wind” IV. 49)。しかし、詩人の人生の茨への落下は本詩のフィナーレではない。確かに、パートIVにおいて詩人が「人生の茨」へ落下して血を流す箇所は、詩人の死を意味する。だが、本作品は一貫して、自然界で生じる季節のサイクル、すなわち冬の死から春の再生へのサイクルを、世界の倫理的・政治的停滞(死)から改革(再生)に重ねて描いている。もし詩人が世界の再生に参与しているのだとすると、パートIVにおける詩人の死は再生へと向かうはずである。では、パートVで詩人はどのように再生するのか。

パートIVにおいて一枚の枯葉になって風に吹き上げられることを望んで落下した詩人は、続くパートで戦略を変える。詩人は「森(the forest)」のように、西風の「豎琴(lyre)」になることを望む(“Ode to the West Wind” V. 57)。もはや、子ども時代のように西風の仲間として身軽に動くことはできないが、地面に根を下ろした「森」のようになることで「秋の深い音色(a deep, autumnal tone)」を奏でることに成功する(“Ode to the West Wind” V. 60)。詩人は子ども時代とは同じではない今の現実を受け入れることで、理想の詩人になるのである。ゆえに、時が引きおろすのは詩人の魂や想像力ではなく、詩人の身体である。詩人の身体は「森」のように地上に根を下ろして動かなくなり、上昇できない。その一方で、詩人の言葉や思想は「枯葉(withered leaves)」のよう

に、世界に撒き散らされて自由に動いていく (“Ode to the West Wind” V. 64)。この際、詩人と言の葉は切り離されて、「死んだ思想 (my dead thoughts)」となる (“Ode to the West Wind” V. 63)。だが、詩人の枯れた言の葉には西風の精神が吹き込まれて、世界の改革を促す「魔力 (incantation)」をもった言葉としてとして再生し、世界への影響力を発揮することになる (“Ode to the West Wind” V. 65)。つまり、詩人の身体は重く地上に縛られても、言葉には詩的精神が吹き込まれ、軽々と高みへと上昇し、世界へ影響力を与えることができるのである。パートVの初めに、「豎琴」として「秋の深い音色」をひとつ奏でていた詩人は、本詩の結末部分において、詩人は西風を自らの中に取り込んで、預言のトランペットを通して、西風のような「力強いハーモニー (mighty harmonies)」を吐き出す (“Ode to the West Wind” V. 57, 60, 59)。「秋の音色」は不定冠詞 a の付いた単数形である一方で、「力強いハーモニー」は複数形であることに注目したい (“Ode to the West Wind” V. 60, 59)。ひとつの音色を大きなハーモニーへと変化させるのは、西風の精神を取り込んだ詩人の身体なのである。このように「西風に寄せるオード」はシェリーの言葉・想像力への信頼が強調された結末である。

## Works Cited

- Blank, G. Kim. *Wordsworth's Influence on Shelley: A Study of Poetic Authority*. London: McMillan, 1988.
- Chandler, James. *England in 1819: The Politics of Literary Culture and the Case of Romantic Historicism*. Chicago: U of Chicago P, 1998.
- Curran, Stuart. *Shelley's Annus Mirabilis: The Maturing of an Epic Vision*. San Marino, Huntington Library, 1975.
- Holmes, Richard. *Shelley: The Pursuit*. London: Harper, 1974.
- Kapstein, I. I. “The Symbolism of the Wind and the Leaves in Shelley's “Ode to the West Wind” *PMLA* 51 (1936): 1069-1079.
- “Leaf.” *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.

Reiter, Seymour. *A Study of Shelley's Poetry*. Albuquerque: U of New Mexico P, 1967.

Shelley, Percy Bysshe. *The Poems of Shelley: 1819-1820*. Eds. Jack Donovan, Cian Duffy, Kelvin Everest and Michael Rossington. Vol.3. Harlow: Longman, 2011.

Wasserman, Earl R. *Shelley: A Critical Reading*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1971.

アルヴィ宮本なほ子編『対訳シェリー詩集—イギリスの詩人選(9)』、岩波文庫、2013年。